留学報告書 II（2021 年度留学生）

塾内在籍校・学年（派遣時）	慶應義塾高等学校２年
留学先校名	Winchester College
留学期間	2021 年 9 月　から　2022 年 7 月まで

留学を振り返って

留学先では、期待どおりの生活を過ごせましたか？

期待を遥かに超える一年間でした。
一年間を通して退屈している時間はほとんどありませんでした。
さまざまな ‘機会’に恵まれていたことが、数多く見つけた Winchester の魅力の一つです。
そのなかでも僕にとって特に貴重だった機会は以下の３つです。

1. Kenneth Clark Final
2. EPQ on ‘Manners Makyth Man’
3. Community Service

1. Kenneth Clark とは、Wincoll 伝統の、美術に関するスピーチコンテストです。第四・五学年全員が参加し、Semi-final を経て Finalist の 6 人が選ばれます。僕は千利休の‘待庵’とからめて無為自然を始めとする道教の考え、禅、詫び、吾唯足知の考えに関する 10 分間のプレゼンテーションを行いました。コンセプトが難しいだけに客観的意見を大事にしようと考え、House master, Matron（寮母）, Host family,　実際に茶道の経験がある家族の友人など、多くの方々にフィードバックをいただき自分のできる最高のプレゼンテーションに仕上げました。Final の舞台では Warden, HM をはじめ数多くの先生方、Old Wykehamists(卒業生)、Wykehamists（生徒）の前でプレゼンする機会を設けていただき非常に貴重な経験でした。スピーチ後の、父を招待しての特別ディナーもとても印象深いものでした。

2. EPQ（Extended Project Qualification）は高等学校の卒研に近いもので、1 年間を通して自分の好きなトピックについてリサーチし 5000 字のエッセイを書くというものです。僕はトピックを Winchester のモットー、’Manners Makyth Man’にしました。「気品の泉源智徳の模範」とどこか通ずるところがあるのでは、と感じ留学前からこのモットーには関心がありました。‘To what extent is Manners Makyth Man relevant today?’の題目の下、第一段階として学校の創設者 William of Wykeham がこのモットーに込めた意味、第二段階として今の Wykehamists はモットーをどう捉えているのかを探っていきました。この EPQ を経て多くの人とお話しする機会がありました。例えば学校の先生に頼んで OW と繋げていただいたり、20 名以上の先生方/50 人以上の Wykehamists とモットーについてお話ししました。学年ごとに考えが違うのでは、とも考えたため各ボーディングハウスを回りそれぞれの学年から数名ずつ話を聞いていきました。William of Wykeham が建てた New College, Oxford の教授に会いに、実際に New College まで足を運んだことも印象に残っています。学年末の第四・五学年全体での集会の場で特別に Headmaster の許可をいただき僕の EPQ についてプレゼンテーションをさせていただけたことも大変貴重な機会でした。

3. Community Service は毎週義務化されている地域へのボランティア活動です。数多くの選択肢があるなかで、僕は Charity Shop（地域のお店のお手伝い）、Primary School Natural History（地元の小学生に自然体験の機会を与える活動）に従事していました。ただでさえ自然が少ないであろう都会に住む子供たちがインターネットに多くの時間を割くようになったことを考えた時に、2 つ目の活動には特にやりがいを感じていました。‘自然’に対する態度が西洋人と大きくことなる日本人としてこの活動に参加していたこともなにか意味があったのかもしれません。この Community Service 自体のコンセプトも興味深かったです。学校が創業された当時、3 つの機能があったそうです（これは EPQ を通じて知りました）；Intercessory, Scholastic, Clerical。この 3 つ目の Clerical（たび重なる Plague で減少していた ‘教育された聖職者’ をつくる）と合わせて「社会に役立つ人を育てる」、という考えが Community Service の根底にあるのかもしれません。これもまた EPQ を通じて 1 人の OW から教えていただいた言葉

‘noblesse oblige’（ある程度の地位にはそれ相応の義務がある）とも何か通ずるところがあるのでしょうか。（Wykehamists が貴族と言っているわけではなく、彼らがトップレベルの教育を受けているのだから何かしらの形で社会に還元する ‘義務’があるのかもしれない、という解釈です。）

このほかにも経済の Society（後述）関連で他校合同の Policy Making Competition に参加したり（2 位入賞）、哲学のトピック(僕は Karl Popper の Falsification)についてオンラインで他校の生徒とディスカッションをしたり、寮でのクリスマスコンサートで ‘戦場のメリークリスマス’をピアノ演奏したり、卒業生主催の Entrepreneur Hub に参加したり、イギリス政府のコロナウイルス対策の有効性について,数多くの生徒の前で生徒代表 2 人のうち 1 人として教師の方 2 人と議論する機会があったり…と本当に数多くの機会に恵まれていました。
もうひとつ、捨てがたいのが寮生活とそこでのかけがえのない友人です。寮生活が初めてだった自分にとってこの一年は、時にはしんどくも本当に充実していました。寮対抗の歌唱コンテスト、サッカー大会、10km マラソン大会に参加したことも寮での絆をより強くしてくれました。

クラブ活動や課外活動など、学業以外の活動について教えてください。

課外活動はスポーツ、音楽、Society（日本で言う文化系部活動）に力をそそいでいました。
スポーツは学期ごとにメジャースポーツが変わります。僕は一学期にサッカー、二学期にラグビー・テニス、三学期にテニスをプレーしていました。時にはクリケットのセッションに参加してみたり、パデルや Winchester College Football を体験したり、ということもありました。在籍していた高等学校と異なりさまざまなスポーツをプレーする機会があり、また他校との交流試合も非常に盛んであったことは僕にとって新鮮でした。
音楽はピアノのレッスンを週一回とっていました。過去の先輩方も仰っていた通り、Winchester では多くの生徒がなんらかの楽器を演奏しています。2 学期の終わりからバロックアンサンブルに入れていただくためにリコーダーのレッスンも取り始めました。幼稚舎時代に触れ合っていた楽器を久しぶりに手にした時はどこか懐かしさも感じ、学年末にはアンサンブルの一員として演奏することができ、とてもいい経験でした。
Society は経済学についてのもの（e.g., Behavioral Eco Soc, Eco and Management Soc）や MUN, Sustainability Soc の活動に参加していました。Eco and Management Soc ではローカルのお店のコンサルティングの体験をさせていただき、興味深かったです。また、最初に Second Master にアイディアを話してからかなり時間はかかったのですが、Japan Soc という日本・東洋の文化歴史を伝える Society を立ち上げることもできました。普段は教室を一つお借りし、毎回 15 人ほどの生徒が集まってくれました。
また、ある時は特別に大きなホールを使い数百人の前でお話しさせていただいていました。トピックは原爆について、アニメ・漫画文化と日本語の特異性、もったいない文化・金継ぎ、桜・武士道などについて、僕がプレゼンをする形で（時にはディスカッションも織り交ぜて）行っていました。慶應義塾、そして日本の代表として留学している以上間違った情報は伝えたくなかったのでそれぞれのセッションにかなり時間を割いた（e.g., 原爆については、身内に被爆者がいなかったので知人に頼んで被爆三世の方から Zoom でお話を伺いました）のですが、僕が日本からの留学生として Wincoll に貢献できる一つの良い手段だったのでは、と考えています。

ルームメイトはどのような方でしたか？（1 人部屋だった場合は、同じ寮の友人について教えてください。）

学期ごとにルームメイトが変わりました。
1 人目はタイ出身の記憶力に長けた友人でした。僕が日本語の自己紹介文を 5 文ほど教えると数ヶ月後にもまだ覚えていました。僕が寮についてまもない時に多くの友達に紹介してくれました。今もとても大事な友人の 1 人です。
2 人目は中国出身の友人でした。数学に強く、よく教えてもらっていました。
3 人目はインド出身の友人でした。とても気が合う友人でした。僕は夜勉強していたのに対し彼が朝はやくに勉強するので睡眠習慣が変わる、というボーディングスクールならではの苦悩(?)もありました。

学業について

各授業について授業の内容・進め方・課題・試験・日本との比較などについて触れながら記入してください。

A-Level というカリキュラムの、Further Math, Philosophy, Economics を履修していました。

それぞれの科目で2人ずつ先生がいました。課題の量でいうと高等学校と比べ圧倒的に多かったです。必ず毎週各科目から宿題が課され、初めはその課題をこなすだけでも苦労しました。
授業の進め方は、生徒が積極的に発言したり、生徒間での共同作業が高等学校に比べ多かった印象です（特に経済、哲学）。
Further Mathは日本とカリキュラムが違ったり、自分のとっていない物理とかなり重なっている分野があったりで苦労することも多かったですが、授業の進みがゆっくりで先生が丁寧に解説して下さりました。
PhilosophyはEpistemologyとMetaphysics of Godのトピックを主に学習しました。やはりエッセイ課題に苦労することが多かったですが、カリキュラム外のことを扱うこともあり（e.g., Roe v Wade事件に関する議論への哲学的アプローチ）、非常に興味深い科目でした。
EconomicsはMirco, Macroに分かれていました。暗記よりもグラフ、実世界での例を使って自分の議論を強くすることが重視されていました。先生も親切で興味深い科目だった反面、今の資本主義を常に絶対だと見做すカリキュラム構成に疑問を感じることもありました。
試験は高等学校の期末試験にあたるテストが11月と6月にありました。

今後について

この派遣留学を通して、自分自身にどのような変化があったと感じていますか。

自信がつきました。留学当初は授業中に発言するだけで神経を使っていたのが、学年末には胸を張ってHeadmaster, Second masterはじめとする先生方、300人近くの生徒の前でスピーチをし一年間を終えました。蹉き苦しみ、時には遠回りをしながらも手に入れたこの自信はそう簡単に崩れるものではないのでは、と考えています。
その一方、50カ国以上から集まる意識高い友人に囲まれる素晴らしい環境で自分にまだまだ足りない部分も浮き彫りになりました。Div（Winchester独自の授業。決まったカリキュラムがない。）では生徒の歴史に関する知識（いわゆる教養）にたびたび驚かされていました。
一年間を経て、‘将来は何か社会に役立つことをしたい’という大きなビジョンを持つようになりました。このような素晴らしい環境で一年間過ごしたことでたくさんの刺激を受け、‘全社会の先導者’たるものへの大きなTao（道）が開かれたのではないか、と考えています。

今後の派遣留学生へのアドバイス

（事前に日本で学習しておいた方が良いことや、用意しておいた方が良いことがあればお知らせください）
留学前にできることは限られているでしょう。僕は日本の歴史宗教文化に関する知識を蓄えていきましたが、実際、友人・先生方とそれらについてお話しする機会がよくありました。
一つ心に留めておくべきことは派遣留学生のみなさんがこれから挑戦する一年間は決して楽ではない、ということです。僕はいわゆる非帰国子女だったためいわずもがな英語に大変苦しめられました。昼食時に友人が仲良く談笑していても何を言っているのかさっぱりわからず、なんてことがほとんどでした。たとえ英語力がある人でも、それまで何年間も同じボーディングハウスで過ごしてきた友人の輪にすぐに溶け込むこともそう簡単ではないかもしれません。行く先々の学校で過去の派遣留学生の先輩方のご活躍を先生方から聞き時にはプレッシャーを感じることがあるかもしれません。多くの ‘チャンス’ があるがゆえに時には取捨選択で迷うことがあるでしょう。
ただ、決して身をすくめるようなことはしないことです。みなさんは、英米のトップスクールに ‘慶應義塾の代表’として留学することになります。それが何を意味するのか、渡航前によく考えてみてください。それがみなさんにとっていいプレッシャーになり、またモチベーションになるはずです。
日本にいる間に、おいしい日本食を食べ、家族・友人との時間を大切にしてください。
慶應義塾という最高に恵まれた環境を自ら抜け出し、新たな世界に挑戦する。僕は去年自分で下したこの決断を今になって強く誇りに思っています。みなさんが一年間を経て胸を張って帰国できるよう、願っています。
何か力になれることがあればいつでも連絡してきてください。先輩方が僕を応援してくださったように、僕もみなさんを応援しています。

以上